

バルガス＝リョサ『**緑の家**』 岩波文庫 2010 年

バルガス＝リョサ(1936～2025)

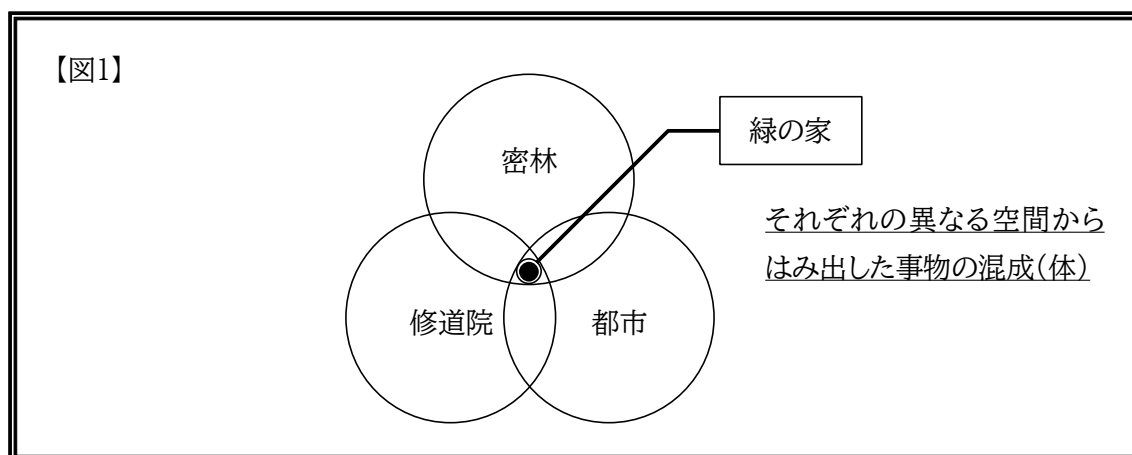
『**緑の家** 下』

◎前回『**緑の家** 上』の議論から

①「**緑の家**」の位置

船越さんから、物語の舞台が「密林(≡未開社会・石器時代)」「修道院(≡中世)」「都市(≡近代)」と異なる空間が、同じひとつの舞台にあげられているという指摘があった。これらの空間はそれぞれ隣り合って、重なり合う。たとえば、「密林」と「都市」の重なるところでは、ゴムの取引や詐欺、強奪があり、「密林」と「修道院」では教化がある、というように。

と、すると「**緑の家**」はどこに位置づけられるか？【図1】



「**緑の家**」は、それぞれの異なる空間からはみ出した事物の混成(体)としてみることができるのではないか。(密林から来たとされるアンセルモ(密林→都市)によって築かれ、一度ガルシーア神父(修道院)によって全焼してしまう。ところが次の**緑の家**では、かつて修道院で教化を受けた密林の少女、ボニファシア(密林→修道院→都市)が、ラ・セルバティカと名乗って娼婦になっている。そして、この2番目の**緑の家**の主は、ラ・チュンガで、アンセルモと、出自不明で、キローガ夫妻とともに強盗に襲われ、盲目となったアントニア(都市→)の子どもだった。つまり彼らはそれぞれの空間から居場所を追われた者たちだった)

②国“家”について

一方で、国家のまとまりについても議論が出た。

私たちの国家観(島国、日本語)と、本作『**緑の家**』が描き出すような、さまざまな多様性を内に抱えるペルーという国を考え合わせたとき、ひとつの国家として成り立つのだろうか、という問い

かけがあった。

しかし、作中で描かれる「緑の家」は、このような懸念(あるいはもしかしたら、為政者が「国がまとまらない」といって持て余していること)を余所に、**強かな生**の営んでいると感じる。(このような強かな生は、以前の課題図書、ガルシア＝マルケス『百年の孤独』のウルスラを想起させた。あるいは、小川さやか『「その日暮らし」の人類学 もう一つの資本主義経済』の Living For Today)

このような強かな生としての混成(体)からすると(前回の議論でも指摘があったように)、人口に膾炙している「多様性」というスローガンが、お題目に過ぎないように感じられる。斎藤幸平が『人新世の資本論』で「SDGs は現代版の大衆のアヘンである」と SDGs を批判するのと同じように、美辞麗句で糊塗できない人間の実相が活写されている、と感じる。

それは如何ともしがたいもの同士の**ぶつかり合い**だといえる。したがって、「緑の家」が描くのは、多様性ではなく、混成(体)。 調和(ハーモニー)ではなく衝突(コンフリクト)。

多様性	混成(体)
調和	衝突
平板的	立体的

衝突というと穏やかではないが、にもかかわらず、この手に負えなさに魅力を感じ、むしろ調和とされるものの窮屈さ(たとえば、神父を抱くカトリック教会)を思い出させる契機が、この作品にはあるのではないか。

(しかし一方で聖書には、「平和ではなく剣を」という節がある(マタイ福音書10章34節)。「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。/わたしは敵対させるために来たからである。人はその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。」)

◎「衝突」を描く方法としての「思い出す」という(現在進行形の)行為

前回、本作の特徴として、ばらばらに配置された物語の構成や、異なる場所、時間への場面転換が、それと明示されずにつなが合わされていることを指摘した。

①ばらばらの配置について

いまや、読者はあるていど、物語の全体を見渡すことができ、仮に労を厭わなければ、本作を物事が生起した順番にしたがって、並び替えることもできる。では、作者が目論んだのは、何か。

つまり、物事が生起した順番と、私(読者)が経験する順番は違うということだ。端的に、私たちが生きている現実、物語のように順番が整っているわけではない。作者はこれを物語で示そうとしたのではないか。

われわれはじぶんたちの生きている現実と決して完全に同時代にいることはない。歴史は仮面をつけて進行する。歴史は前の場面の仮面をつけたまま次の場面に登場するのだが、そんな

るとわれわれはもうその芝居がさっぱりわからなくなる。幕が上がるたびに、話の糸口をたどりなおさなければならないのだ。(寺山修司『ポケットに名言を』35頁より孫引き レジス・ドブレ(1940～)「革命の中の革命」仏作家。1960年代にカストロのキューバ革命に共鳴、チェ・ゲバラとゲリラ活動に参加。)

さっぱりわからない、というのは、この作品の当初の読後感であった。しかし、ふつう私たちがわかっていると思っているものこそ、じつは話の糸口をたどりなおさなければならないものではなかったか、と気づかせる。(調和があらかじめあるのではなく、むしろ衝突の結果であるということ。)

つまり、本作のばらばらの配置の仕掛けは、物事のはじめには、まず衝突がある、ということに立ち返らせるような効果をもたらす。

②異なる場所、時間への場面転換について

まるで現在の時間が輻輳しているように描写される。しかしこれも、じつはそもそも現在の時間には複数の時間が潜在していたのではないか、ということを感じさせる。

作家の柴崎友香(1973～)は『あらゆることは今起こる』という書物に書いている。(作家はADHDの診断を受けている。)

私の場合は「現在」「過去」「未来」が同じ強度で並んでいる感じ、というか、たぶんそもそもそんなにくっきり分かれていないというか、互いに干渉しあいつつ並存している感じだろうか。

体内の複数の時間は、それほどくっきり分かれていない感じは、私が好きな小説にある。

(柴崎友香『あらゆることは今起こる』医学書院 223頁)

として、ガルシア＝マルケス『百年の孤独』と『族長の秋』を紹介し、以下のように述べている。

(略)

一人のシンプルな視点と語りでは世界の複雑さを表せないし、客観的な三人称も存在しないと思っている。世界を描くには、「ある私」を通した世界の感触を複数積み重ねるしかないし、複数積み重ねたその間から響いてくる声が小説なのだと思う。(221頁)

今は時計があり、デジタル表示のほうがすっかり主流になり、しかも電波で正確な時刻に修正され、スケジュールも連動して管理したりしているから、揺るぎない正確な標準の時間に誰もが結びついて生活している感覚があまりにも普通になっている、と思い込んでいる。

私が自分の中に、あるいは『族長の秋』のような小説を読んでいて感じる時間は、もっととらえどころがなく、可塑的で、不安定だからこそ確かに今ここで起こっていると実感させられるものだ。(228頁)

つまり、正確な時間では表せない時間が、私たちの現在にはあるのだ。

異なる場所、時間への場面転換を、それと明示せずにつなぎ合わせるのは、まさに現在がそもそもそのようなものだという事を著者は示しているのではないか。「緑の家」の現在には、さまざまな時間が輻輳し、**立体的**になっている。

◎リアルについて

福間さんからの宿題として、「立体的な現実」を考えるときにラカンが参考になるのではないか、という指摘をいただいた。ジャック・ラカン(1901~1981)は、人の心のあり方を「想像界・象徴界・現実界」という三つの次元でとらえている。

ポール＝ロラン・アスン『ラカン』(白水社)には次のような説明がある。

「精神病の問題は、現実性を失うことではありません。現実性を置き換える柔軟性が失われているのです」(80頁)

つまり、私たちは現実そのものをそのまま生きているのではなく、常識的な枠組みを通して生きている。たとえば、時間を24時間に区切って時計で示すことや、空間を測量可能な均質な広がりとして扱うこと。「私はひとりの私として責任を担う」といった自己の枠組みも同様だと考えることができる。

ラカンによれば、精神を病むとは、この「置き換え」がうまく働かない状態であって、現実を失うことではなく、むしろ、普段は常識によって覆い隠されているものが綻ぶとき、現実そのものが顔を出すことをいう。そもそも、この「常識」は私たちが成長の過程で身につけてきたものであり、もし別の形で獲得していたとすれば、私たちの「常識のあり方」もいまとは違っていたかもしれないというのは、想像するに難くない。

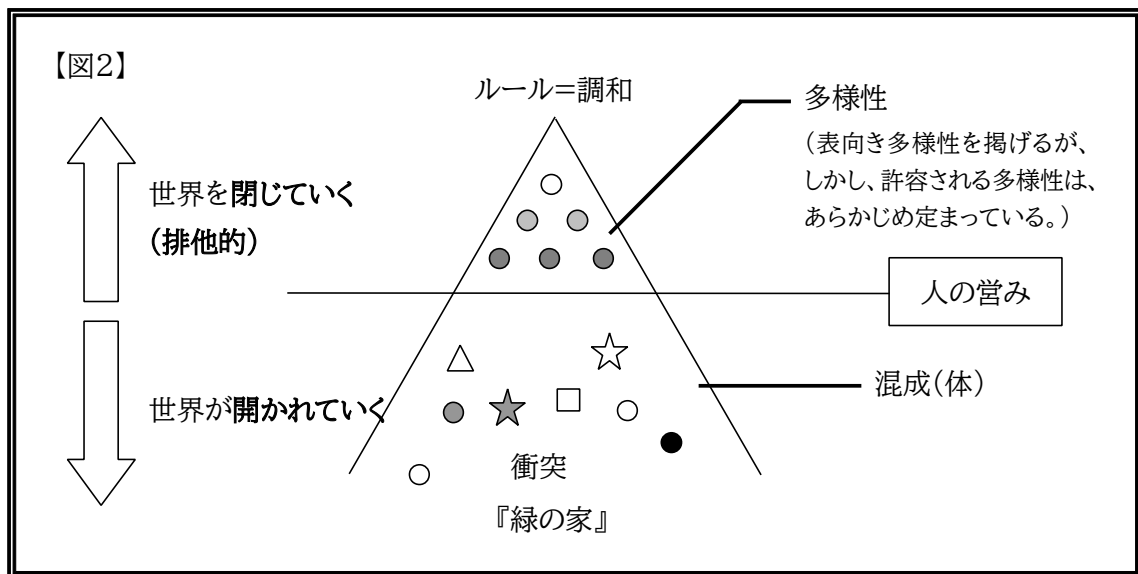
ラテン・アメリカ文学が示しているのは、まさにこの「別の常識のあり方」だといえる。私たちは、そうした「別の常識のあり方」としてのラテン・アメリカ文学にたくましさを見出すのではないか。

◎国家のまとまりについて

あらかじめ定められた国家のまとまりがあるのではなく、まずぶつかり合いがあり、そのあとで、形づくられていく国家というものを考えてみる。このような国家を考えると思い出されるのは、スピノザ(國分功一郎『スピノザ -読む人の肖像』254頁)である。

スピノザは自然な権利に反することなく社会が作られることを目指していた。自然な権利とは、どんなことでも行う自由、その個体に自然が与えた能力を自らの思うがままに発揮することだった。スピノザはこの自然権を残しながら、日々、契約を更新し続けることを提案する。

本作に引き寄せて考えれば、あらかじめ定まったルールで囲い込むのではなく、衝突を経て成り行きで形づくられていく、「緑の家」のような自生的な秩序が考えられるのではないか。



◎強かな生の物語、赦されていく物語？

たとえば、275頁、IV-2章、リトゥーマによってニエバス・アドリアンが捕えられ、別れさせられたラリータだったが、時を経て、402頁で、アキリーノにニエバスのその後を聞かされたときには、「へえっ、そんなに長い間入ってたのかい」と、他人事のようにいう。

その気性の荒さゆえに、神父に悪態をついていたリトゥーマも諭されて「すみません」と謝り、そのガルシーア神父も、初めは渋っていたアンセルモの通夜を引き受けることにする。じつはアンセルモも「緑の家」が全焼させられても、ガルシーア神父を悪くはいわなかったという。

物語の主要な人物たちは、物語が進むにつれ、次第に赦されていく、ともいえる。

◎まとめ、全体を統べるルールが失効している世界

宣教師を教師とすることができない、教師は宗主国、すなわち植民者だから。

日本はまがりなりにも近代化において、プロイセンを教師とした。

戦後はそれがアメリカにすげ替わった。しかし現在では、そのアメリカももはや世界の警察官を降りている。冷戦構造においては、たとえそれがまがいなものだったとしても、資本主義や共産主義などの実現を目指す理念があった。しかし、現代はまさに先を示してくれる(宣)教師がいないのだといえる、教師なき現代。

この視点に立つと、ラテンアメリカ世界は、すでに現代の日本に先立つこと、ずいぶん前から教師なき世界を生き、試行錯誤を繰り返してきた先達であるといえる。現代においてバルガス＝リョサの作品に惹きつけるものがあるとすれば、日本もまたこのような教師なき世界に入ったからではないか(『百年の孤独』は昨年の文庫化を経て異例の大ヒットだという)。

ドゥルーズという哲学者は指導者については次のようにいう。

「私たちは「私がするのと同じようにせよ」という者と一緒には何も習得しない。私たちの唯一の指導者は「私とともにせよ」という者たち(後略)」(山森裕毅『ジル・ドゥルーズの哲学』159頁)

メモ・論じていない問題など

- ・アンセルモを「お前」と呼ぶ発話者について
- ・フシーアの位置
- ・複数の名前(分人?)

- ・黒人という主語の大きさ
- ・言葉のうえでの認識と現実について
- すなわち、なぜ文学を読むのか?
- ・混成(体)＝多元性?